

289

289-Me25-4ㄅ



1200500732119

青森市新町國民學校編
天皇青森巡幸記



始



289
ME25
4



青森市新町國民學校編

明治天皇青森巡幸記

青森市新町國民學校編



明治
天皇
青森
巡幸
記

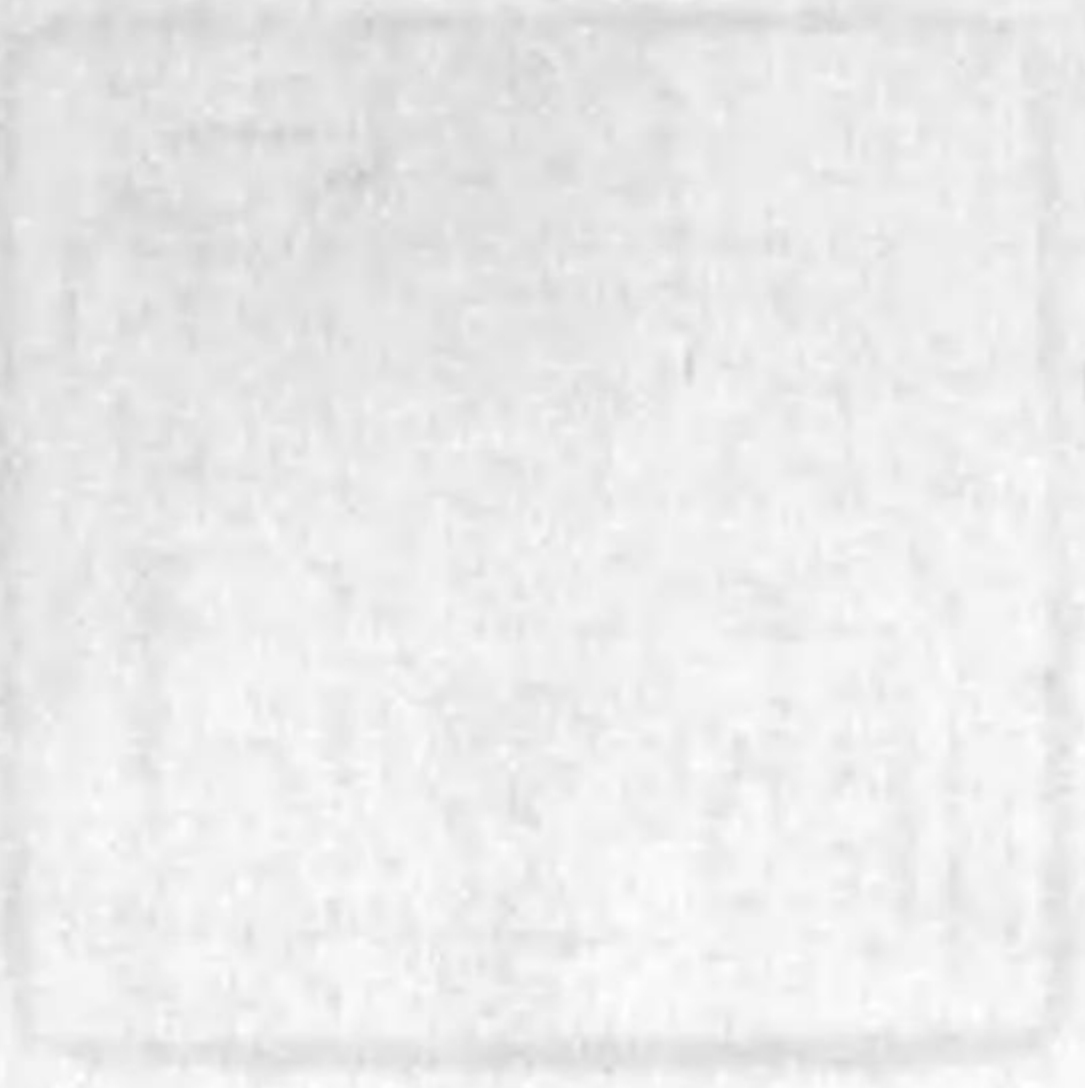


景仰聖德

明治十四年八月二十九日此埠頭ヨリ扶桑艦
ニ乗御同九月七日函館ヨリ迅鯨艦ニテ著御
御上陸在ラセラル 陸軍大將一戸兵衛謹書

明治九年七月十六日此埠頭ヨリ明治丸ニ
乗御函館へ御渡海遊ハサル

元帥海軍大將伯爵東郷平八郎謹言



獻頌歌

文部省檢定済
青森市新町國民學校訓導
村林平二作曲

おごぞかに

MP MF MP

一 マ マ ツ ヒ ノ マ ナ ヒ ノ マ ド ニ サ
ニ カ リ ゼ め の マ ナ ヒ ノ マ ド ニ サ
シ カ イ リ ヨ テ リ コ マ ラ ヲ フ ル の ラ ミ チ ヤ ミ
ト ニ ソ ヒ カ カ ヤ ニ ん

獻頌歌

青森小學二等教員

一 兩角衛門歌

天津日の學びの窓にさしいりて

開くるふみの道ぞかどやく

青森小學二等教員

二 伊關鐵之助歌

かりそめの玉の御座の光より

まなびの道やいごと開けむ

序

我が聖徳公園は、畏くも明治天皇の前後三回に亘つての御乗船並御上陸遊ばされた聖地であるが、此の聖蹟を有する青森市民の感激と誇りが、歳と共に彌々新たなものがあるのは、寔にさることながら、亦以て恐懼の極みである。

而して天皇の青森御巡幸に際して、親しく各方面に亘つて御巡覽を賜つた事實は、實に青森市史に於て特筆さるべき貴重なる事柄である。わけても天皇が青森小學に行幸遊ばされ、一時間有餘の永きに亘つて、児童生徒の學業を天覽遊ばされたといふ事蹟は、恐らく日本教育史に於ても稀に見る盛事でなければならぬ。

さればこそ、當時の教員兩角衛門(陸軍中將兩角三郎閣下嚴父)、伊關鐵之助の二氏が、共に一首の感懷を叙して獻じられたのであるが、其の感激の如何ばかりであつたかは、今から之を想望するに難くはない。教師ばかりではない、學業天覽の光榮に浴した珍田捨己

佐藤愛磨兩氏をはじめ、當時の児童生徒が一意聖旨に對へまつらんと牢記されたことは、後年諸氏の殘されたる偉大なる足跡に徴して最も明かな所であるが、寔に宜なりと申さなければならぬ。

青森小學は、實に現在の長島國民學校並我が新町國民學校の前身であるが、私共は職を本校に奉ずる光榮を思ふと共に、此の感激を指導上の根幹としなければならぬことを切實に感じるものである。即ち今回兩角、伊關兩氏の獻歌に本校村林平二調導をして作曲せしめ、獻頌歌として採用方を七月十五日の記念日の日附をもつて文部大臣に認可申請したのも、亦毎月十五日を聖恩記念日としたのも、全く其の精神に外ならない。

昨昭和十五年、意義深き紀元二千六百年に際會し、悠久日本の盛時を記念せんがため、本書編纂の議を定め、文獻を漁り、古老を訪ね、具さに其の史實の正鵠を期したのであるが、今回愈々其の稿成り、茲に上梓の運びとなつたものである。今や國民學校の開校を見皇國の道を明かにし、皇國民鍊成の基礎指導に邁進するの時、小編ながら之が資ともなる

ならば、編者の喜び寔に之に過ぎるものはない。

終に本書編纂に際し、主として其の衝に當つた森山秀雄調導をはじめ、種々御便宜を御與へ下さいました窪田春吉、和田喜左衛門、伊東善五郎、種市有隣、板谷八郎、久保久助の諸氏に對して深甚なる謝意を表して序とする。

昭和十六年八月十五日（聖恩記念日）

青森市新町國民學校長 工藤直三郎識

目次

一 御巡幸の時 一

二 明治九年の御巡幸 四

一、御巡幸御道筋 四

二、御巡幸の御模様 七

イ、青森へ御着輦の日 七

ロ、御駐輦の日 二二

ハ、御發輦の日 二八

三 明治十四年の御巡幸 二九

一、御巡幸の御趣意	二九
二、御道筋	三〇
三、御巡幸の御模様	三三
イ、御着輦の日	三三
ロ、御駐輦の日	三五
ハ、北海道へ御渡海の日	三六
ニ、函館より青森へ御着艦の日	三六
ホ、御駐輦の日	三九
ヘ、青森御發輦の日	四〇
ト、供奉員	四三

四 青森市行在所蓮心寺	四四
五 御巡幸餘録	四六
一、浅虫椿旅館御小休問題	四七
二、青森小學校玉座の位置について	四九
三、聖徳公園	五一
四、明治丸と海の記念日	五三

一 御巡幸の時

我が青森市は東北地方では仙臺に次ぐ大都會で、東北唯一の貿易港であるばかりでなく、連絡船の偉容が物語る如く、交通都市として、目覚ましい發展をなしつつあります。

この青森市も、今から凡そ三百年ばかり前の昔は、善知鳥村といふ小さな漁村であつたのが、時の津輕藩主第二代信牧公が、その位置のよいのにつけて港を開いてからだんだん榮えたのであります。東北の隅に青森といふ良港があると日本全國に知られるやうになつたのは、今からざつと六十年前、即ち明治九年、畏くも明治天皇の行幸を仰いでからであります。

又この御巡幸によつて東京から青森までの九十六里の輦路が幸されたし開かれもしたのであります。誠に有難い事でありまして、芭蕉のみちのくはあつたが、それは文學の世界だけの寂しい夏草のしげるにまかせたみちのくでありました。

明治天皇の本市に車駕を進められて御駐紮遊ばされた事は三回であります。即ち明治九年七月奥羽御巡幸で函館へ向はせられる際、本市が其の輦路に當るので、蓮心寺が行在所となり、七月十五日御駐紮なされました。又明治十四年八月には、東北・北海道御巡幸の思召しを以て本市に御駐紮、北海道御巡幸後九月七日函館より御還りになり、八日再び本市に御駐紮なされ、弘前・秋田・山形を経て還幸なされたのであります。

よつて青森市民は三度明治天皇の龍顏を拜し奉る光榮に浴した次第であります。

當時は明治九年、明治十四年共に東京・青森間には鐵道交通の便とてなく、長々と山を越え川を渡るの不便がありましたので、畏れ多くも御旅程は殆んど御馬車を御用ひさせられ、峻しい坂道は御馬其の他御板輿で御巡幸あらせられたのであります。

しかも二回共眞夏の炎暑でありまして、從駕日記十符の菅薦には「氷を出せるをかみてあつさをちらせり。」とある程で、天皇御自ら御辛酸を御体験なされながら、親しく鄙國の民情を御察しなされ

れたのであります。御仁慈の高大たゞ／＼感泣の極みといはねばなりません。

又十符の菅薦の一節に、

「みくるまみさとを發せたまひてより、箱箆に至らせたまはるまで、日章の旗を掲げぬ處なし。

供奉の人々の、目に及ぶ限りは、いかなる深山のおくのふせ屋、浦のなぎさのひとつ屋といへどもみなしかり。

過ぎさせ給ふ村里は、軒ごとに水桶を出し、夜は燈火をかゝげなどして、行幸の道を玉さへ敷かまほしきばかりに清らかに掃ひ、川にはいさゝかの流れにも橋をかけ、山をば險しきをも易くはりかへ、待ち迎へ奉りしは庶民の心のひたぶるになびき従ひ奉りて、此の時こそはと競ひたち、勞き營めるにあらでかゝらめやは。あはれ誰かは陸奥を蝦夷の國といひくだしたる。」

とあるを讀んで、輦路沿線の陸奥の民は如何に行幸を仰ぐ日の喜びに満ち／＼てゐたかは想像されます。

「御民われ、生けるしるしあり天地の、榮ゆる時にあへらく思へば」
行幸を仰ぎ奉つた誰も、持つ國民的感激であつたでせう。

二 明治九年の御巡幸

一 御巡幸御道筋

第一回の本縣御通策は明治九年でありましたが、是より先、明治五年四月弘前の舊藩士杉山龍江氏「御北巡を請ひ奉るの建言書」を奉呈して居ります。

杉山龍江氏は幼名を八兵衛といひ、後上總ともいつて、若くして藩の家老となつた人でありました。慶應四年、幕末の暗雲に我が津輕藩も其の波動をうけて喧噪となつた頃、佐幕派の領袖として活躍したのでありますが、藩議が勤王に決するに及んで、藩兵を督して皇軍に従ひ、ついで函館戦

争が起ると、各地に歴戦して武功を建て、勇武の譽が高かつた人でありました。

藩政改革なると、權大參事となり、又衆議員にもなつて政治革新に該博なる意見を吐き、藩が廢されて青森も縣になると、出仕となり、ついで少參事と進んだ傑物であります。

建言書奉呈は、其の出仕の時であります。建言書は長文で、しかも烈々たる至誠に燃え、讀んで強く感動しない者はありません。

この至誠、聞召し給ひましたか、山陽、畿内、西國の諸道に先立つて奥羽地方御幸の事仰せ出されたのであります。

六月二日午前八時、東京御發策、草加、幸手、小山、宇都宮、佐久山、蘆野、白川、須賀川、二本松、福島、白石、岩沼、仙臺、築館、磐井、水澤、花巻、盛岡、沼宮内と御進みになられました。

こゝで、青森縣の那須權參事は、明日より管内に入御あらせられるので、御案内のため參上せしむる旨を言上、これより鹽谷參事が先驅して御案内し、七月九日いよいよ本縣に第一歩を入れさせ給ふ

たのであります。

次の御日程で縣内の風物、人情風俗を御視察なされました。

十日 一戸御發鞆

十日 御晝三戸 御泊三戸

十一日 御晝五戸 御泊五戸

十二日 御晝三本木 御泊七戸

十三日 御晝野邊地 御泊野邊地

十四日 御晝小湊 御泊青森

十五日 青森御駐鞆

十六日 明治丸に便乘函館へ御渡海

函館よりは十八日午前十時過ぎ御出航、二十一日日出度東京へ御還幸あらせられました。この御巡

幸に費した日数は五十日でありました。

二 御巡幸の御模様

イ 青森へ御着鞆の日

野邊地より青森まで、其の間十一里もあるので何時もより早く午前五時に行在所を御發鞆なられ海岸を西へ進ませ給ひました。

この日は風なく、しかも晴天で、海上の風光も殊の外うるはしく、奥羽御巡幸明細日誌には、

「旭日東海に昇り、朝霞錦の如く潮に映じて下北半島縹渺として慶雲の間に隱映し、殆んど仙境の如く、是れまでの山村風景とは大いに異なりて深く叡慮を慰め玉ふ。」

と書いてあります。

六時すぎ、口廣村の如中徳兵衛宅にしばらく御小休、これより清水川、溜子村などの平坦な道を

御通りになると、路傍にははまなしの花露を含んで香り高く咲き続けるのに旅情を慰め給ひ、九時頃小湊に御着葦になりました。

小湊では竹内與右衛門邸で御晝食を召し上り、十時頃御出發になり、藤澤村の坂を越えて山口・中野を過ぎて土屋村に御着きになりました。

この村では東の岡にテントを張り御野立所を設けて御待ち申上げました。

こゝで碧波の上にもちりばめた如く散在する湯の島、かもめ島等の風光を眺めながら、涼を入れさせました。

浅虫を経て久栗坂に至ると、奇石怪巖海岸路上にそば立ち、香り高い野花それに點綴せる一幅の探訪に似た風光に又々御慰みあり、十一時過ぎ野内村蠅崎申松邸に御小休なされました。

いよ／＼青森近くなりましたので縣官達は御出迎に見えましたが、この日の青森の有様は、朝から奉迎者で賑ひ、御道筋の兩側は今日の行幸を拜さんものと近郷より出て來た手拭ほゝかぶりの人

々で群をなし、堵を築いて待めきあつておりました。それを櫂の木で作つた六尺棒を持つた法棒様(今の警官)が其の整理に當つたのであります。

御着葦の時刻が迫りますと、造道から堤橋邊までは、第五聯隊の兵士を先頭に青森の諸學校、弘前の諸學校の生徒男女合せて凡そ四千六七百名、禮服或ひは羽織袴で兩側に立並び、沿道一般奉迎者は頭から手拭をとり、或者は土下座し、或者は手に珠數をもみながら、息をこらして御待ち申上げました。

車駕青森にお入りになると、五聯隊の將兵は捧銃の禮をなし、オーシャンの樂を奏して堵列式を行ひ、其の間を騎兵約六十騎威風地を拂つて前驅し、續いて黒漆の二頭引の御車が進ませられ、御馬車を護衛して又騎兵が続くといふ御行列であつたさうです。

黒漆の二頭引は天皇御乗りの御馬車かと拜察されます。

かくして萬々御滞りなく午後一時半頃行在所となつた蓮心寺に御着葦遊ばされました。

この時、蓮心寺の住職は本間智刀氏で、氏は、身の光榮を深く感じ、奉迎のためわざわざ横濱に注文して仕立てた燕尾服に身を整へ、聖駕を門前に恭しく迎へ奉つたといふことです。

天皇、行在所に入御し給ふと知るや、御迎へのため港内に碇泊してゐた明治丸、テーブル船、その外より祝砲を發して寶祚の萬歳を壽ぎ奉りました。

御行列を拜して珍らしかつた事は、御調度品運送役の雲助が、御調度品をかつぎ、何れも禪一貫の裸で、極めて愉快なリズムの歌に調子をととり、長々と續いて來たことで、しかも其の人数は非常に多く、約八百名位だつたといひます。全く驚かざるを得ません。どうしてこんなに多數の役夫を使用し御調度品を運ばせたかといふと、それには天皇の有難き大御心を拜することが出来ます。畏れ多くも天皇におかせられましたは、東北の地は僻地であるから、物資の調達には定めし不自由なることも多からうし、又其の地の人になるべく心配をかけないやうにとの有難き思召しからなくなされたことで、内務卿大久保利通から發せられた御巡幸心得書の中に「御膳部一式、御椅子、

テーブル、御風呂、御厠等、總て御持越しの筈に付、別段御用意に及ばず、尤も御浴室の議は、御先出張宮内省官員と商議便宜取計ふべき事」とあることからしてもうなづかれるのであり、御仁慈の忝けなさに涙ぐむ程であります。

供奉員二百餘名、主なる高官は、

- 右大臣 岩倉具視
- 參議兼 大隈重信
- 參議兼 大久保利通
- 宮内卿 徳大寺實則
- 侍從長 東久世通禧
- 内閣顧問 木戸孝允

等で、維新の元勳が多いのであります。

ロ、御駐輦の日

翌十五日は、青森第五聯隊、青森小學校、縣廳、伊東善五郎氏邸前の競馬を御巡幸なられました。第五聯隊へ。

午前六時、行在所を御出ましになり、青森第五聯隊へ御臨幸になりましたが、各分隊室、士官室は勿論炊事場までも御覽になりました。

御休みの後、當時、操練所といつて居た舊練兵場で、整列式及び大隊運動等を御覽遊ばされました。

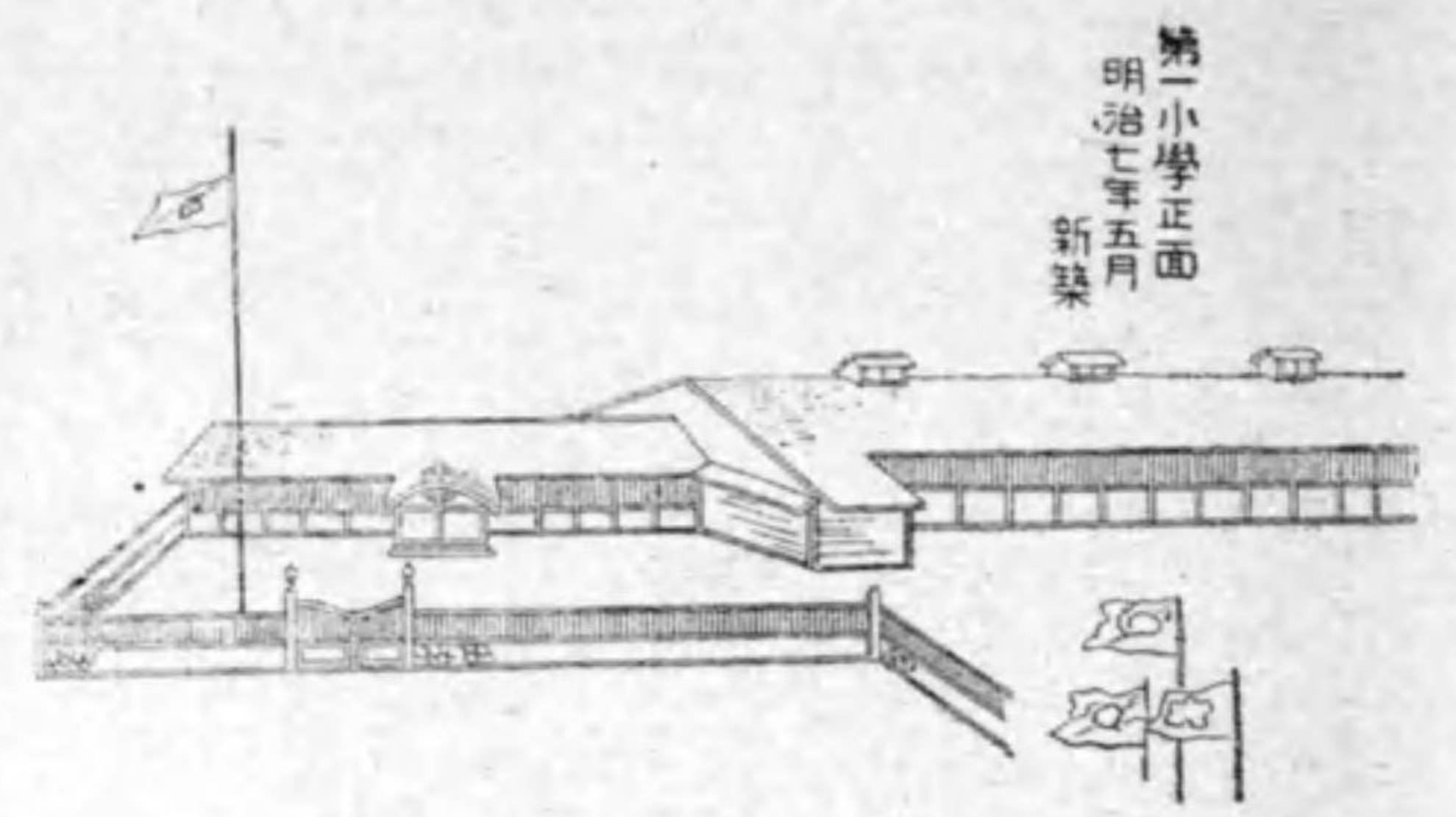
整列式とは今の閱兵であり、大隊運動とは今の分列行進のことではないかと推察されます。青森小學校へ。

もと青森町には町内家塾といつて寺小屋のやうなものがありません。其の最も大きいものは、安定寺で二百餘名、次は大町の木野久兵衛で百餘名、此の他に三四十名を收容して教へた所も相當あり

りましたが、明治六年七月、これ等の家塾を廢して假の小學校を正覺寺に設け、これを青森小學校としたのであります。更に七年五月には、藩政時代の倉庫を新町に移轉して校舎としました。其の場所は、現市役所を中心に東西に長く、平屋造りで、北に玄關を開いて建てたもので、南側に校庭がありました。

青森小學校職員生徒一同の奉迎記念寫眞を見ますと、學校の後の木立の中にお宮らしいものが見えますが、これは當時の神明宮本殿で、現在の地に照し合はせて見ますと、裁判所揭示板のあるあたりになるやうです。

お宮の入口は、元の柴山醫院の所であつたさうですから、

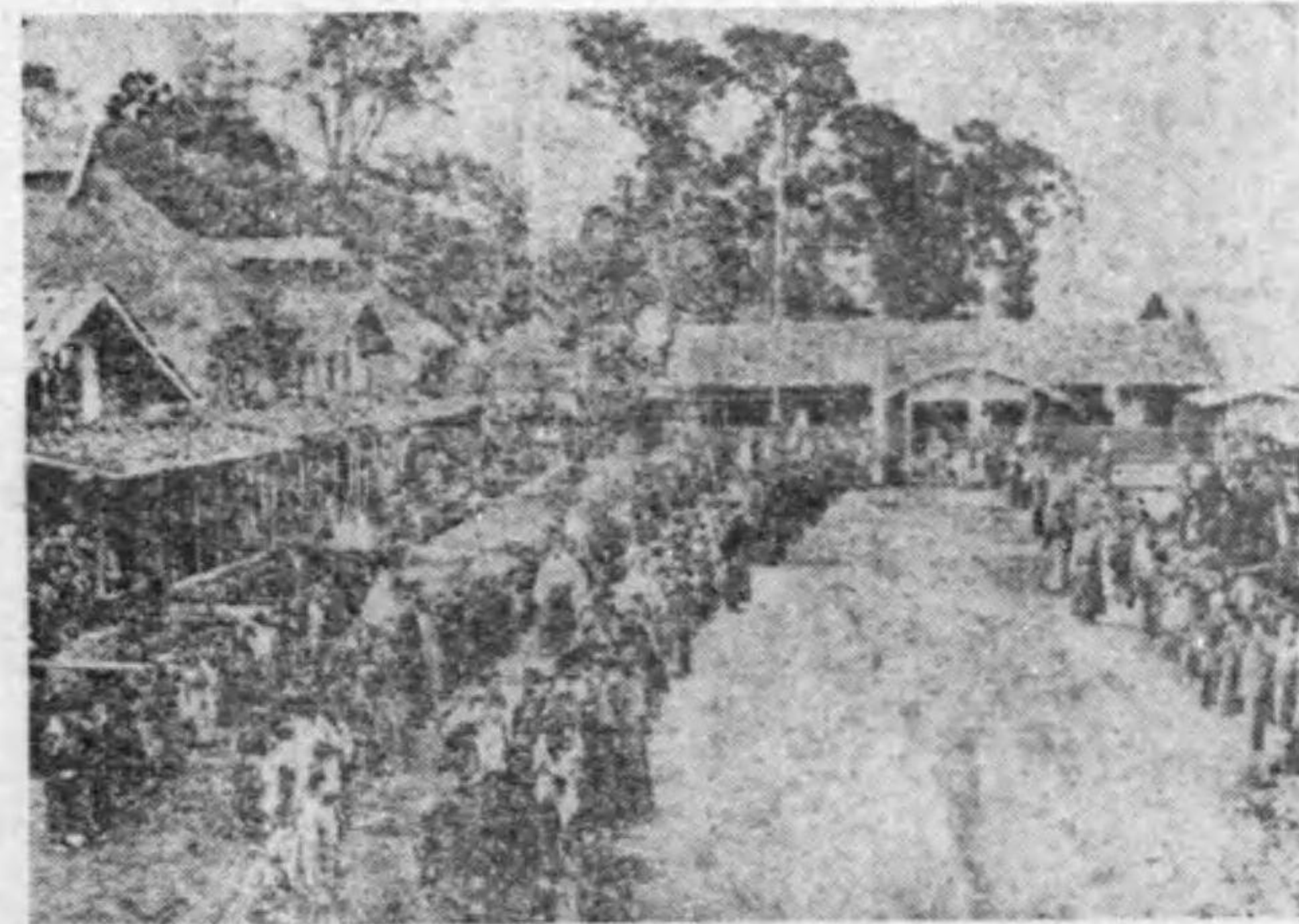


柳町刑務所を中心附近一帯は其の境内であつたらうと思はれます。

明治天皇の臨御あらせられたのは其の頃の校舎でありました。

當時、青森小學校は、訓導土岐八郎氏の外に男教員二十一名、生徒五百二十七名、學級數十七ありました。

青森女子小學校は棟續きとなつて、男教員五名、女教員五名、生徒數二百二十九名、七學級でありました。そして訓導土岐八郎氏が校長を兼ね、青森小學校と同じく經營して居りま



明治九年七月十五日 青森小學校臨御に當り同校門前職に生徒一列御迎せり所(和喜田在衛門氏贈)。

した。

参考までに青森小學校及び女子小學校職員の名を記して見ませう。

青森小學校

訓導	土岐八郎	一等教員	細川弘	二等教員	荒川留四郎
二等教員	兩角衛門	二等教員	伊關鐵之助	三等教員	廣瀬常之助
三等教員	赤平良助	三等教員	柿崎兵治	三等教員	笹鎌之助
四等教員	永野春次郎	四等教員	太田靜	四等教員	今井毅
四等教員	中村慶次郎	五等教員	毛内六郎治	五等教員	成田次郎
五等教員	原子敬之進	五等教員	工藤卓爾	五等教員	井上富之助

五等教員

一 柳文彦

六等教員

長坂勝吉

六等教員

赤沼忠三郎

六等教員

林武藏

以上二十二名

青森女子小學校

三等教員

鈴木捨四郎

三等教員

今さわ

三等教員

秋元きよ

四等教員

小山内忠作

四等教員

早川關三郎

五等教員

鶴井萬兵衛

五等教員把針科

出間かめ

五等教員把針科

高津いし

六等教員

葛川三郎

六等教員

一 柳ミツ

以上十名

さて、

青森小學校に臨御遊ばされたのは、午前十時頃で、かねて設けて置きました玉座に就かせられま
すと、生徒八百餘名の体操を御覽になりました。体操がすみますと、一旦御休息所に入らせ給ひ、
御休みの後再び玉座に就かせられて親しく學業を御覽遊ばされることになりました。
教授者は土岐八郎先生、學課は地理、教材は「萬國地圖暗射」となつてゐますが、昔の「國づく
し」のやうなものであつたらうと思はれます。

生徒は、

青森小學校から

藤林乙吉、北谷善作、藤田重義、藤田重守、樋口亮、奥田省藏、高北義成の七名

弘前白銀小學校から（今の朝陽校）

成田莊太郎、杉山泰助、奈良才吉、成田市太郎、宮崎庄七、挫岡善之助、間宮直之進、山田文

三郎、成田直衛、水木正俊の十名

田名部小學校から

菊地善八、中田操、木村重功、小池尙、和田茂の五名

合せて二十二名であります。

之等の生徒が、天皇陛下の御前で、土岐八郎先生の間ふことにそれ／＼答へたのでありますが、玉座の右側には維新の元勳岩倉具視、大隈重信、大久保利通、木戸孝九等が控へ、其の向側にもお供の偉い方々が多数控へて居たやうで、其の中で御前授業をしたのでありますから、教壇に立つた土岐先生は勿論のこと、授業を受けた生徒達はどんなに感激したことでありませう。土岐先生が奉呈した奉祝文の中に「臣等生れて昭代に遭遇し千古未曾有の盛典を仰ぐ事を得たり」と書いておます。まことに千古未曾有の教育盛典であつたらうと思ひます。

演説 ハンニバル士卒ヲ勵スルノ辯

文題 青森へ御着葎ヲ祝スルノ文

頌歌 珍田拾己

演説 アンドル・ジャクソン氏 合衆國上院ニテノ演説

文題 開花進歩

頌歌 森可次

演説 セシロ・カテリンヲ語ル辯

文題 教育

頌歌 伊藤舜山(重行)

文題 一種奇怪ノ引力

頌歌 川村敬三

文章 朗讀 文題「愛」

頌歌 佐藤次郎

(佐藤愛磨改め)

文題 外國交際ノ要用

文題 剛 氣

頌歌 田中五郎

文題 明治天皇ノ北巡ヲ祝スルノ文

頌歌 成田良司

朗文章 文題「時」

頌歌 佐田吉之丞

朗文章 文題「自給」

頌歌 工藤儀助

頌歌 武田邦雄

右のやうに、演説、英語による作文、文章朗讀をなしたのですが、文章と演説の二科が未だ終らないうちに、お還りの刻限に近づいたので、一同は起立して齊しく頌歌を唱へ、御祝ひ申上げました。頌歌は聖書五十番を天皇頌徳の意に譯したもので、三番までであります。

一番 御威を祝へ ありとある人、かしこみ額づけ蒼人草

かぶりをさゝげよ、あがめまつれよ、
すべての王と

二番 琴をしらべよ、雲の上人、御國をしろす王の前

ふしうやまひて、あがめまつれよ、
すべての王と

三番 わが秋津洲の人々は、都も鄙もわかちなく、

同じ心にほめうたひ、あがめまつれよ、
すべての王と、

清音朗々として堂に響き渡り、感激の餘音でう／＼たる裡に終つたのであります。この間約一時間餘の永きに亘つて居り、しかもこの日は暑さも相當にはげしく、八十八度の高温

であつたにもかゝはらず、御熱心に御覽あらせられ、更に御奨励の思召を以て小學校生徒には賞として輿地誌略一部代として何れも金一圓づゝ御下賜なされました。又東奥義塾へは、教師英國人イング氏夫妻に拜謁を賜ひ、金一封を御下賜なされた外、英語學生十名には、それ／＼英語中字書一部代として金五圓づゝ賜はりました。

この破格の恩典に浴した一同の感激は申し上げても及ばざることであるが、國に不學の家なく家に不學の人なきを思ふ聖慮の忝けなさに頭が下ります。

あまりの有難さに、土岐八郎先生は奉祝文を、兩角衛門、伊關鐵之助の兩先生は奉祝歌を行在所に奉呈して、感激の赤誠を上達申上げました。

奉祝文

土岐 八郎

天皇陛下北巡の日龍駕青森小學校に臨御あらせ給ひ臣等生れて昭代に遭遇し千古未曾有の盛典を仰ぐ事を得たり。校舎の光榮生徒の幸福何を以て之に加へん。豈獨り青森小學校の光榮のみならずや。管下一般生徒の幸福之より益々多からんとす。臣等衆師と共に天皇陛下の萬壽無疆を祝し奉る。

奉祝歌

兩角 衛門

天津日の學びの窓にさしいりて
開くるふみの道ぞかゞやく

伊關鐵之助

かりそめの玉の御座の光より
まなびの道やいとゞ開けむ

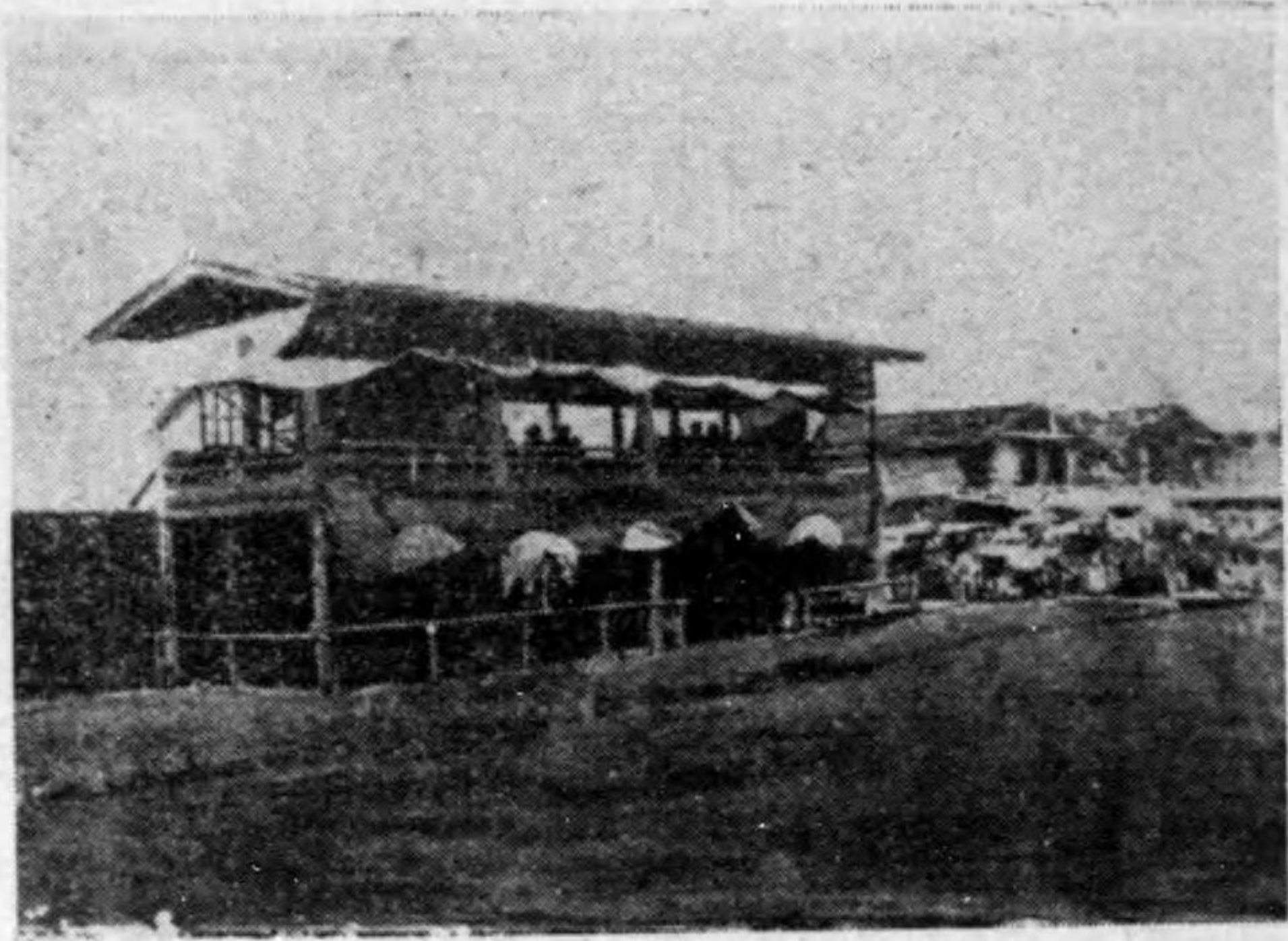
今この奉祝文と奉祝歌を口ずさみ、かつて無き未曾有の教育盛典を偲び奉ると共に、「まなびの道やいとど開けん。」の句に我が新町校発展の歴史をしきりに考へるのであります。

この日あつてから六十三年、御座の光に育まれた學びの道が、我が新町校の輝かしき傳統となつて生々發展の一路をたどり、今日の如く大をなしたものと思ひます。私達はこの榮ある新町校に學ぶ誇りを、しかと身に彫り、この誇りを心として學びの道にいそしむ事こそ聖旨に答へ奉る道かと信じます。

縣廳臨御

青森小學校から十二時前に進心寺の行在所へ御還りになり、午後一時再び行在所御出門、青森縣廳へ御臨幸、縣治のさまを御覽遊ばされました。

鹽谷參事御先導をなして各課を御巡覽遊ばされた後、青森縣産の諸品陳列場に入らせ給ひました。其の品は、鑛石類を始めとして、乾物、野菜、魚貝、海藻、藥種、漆器、生絲、苘、茶、蠟燭、



馬 見 所

陶器、製紙(麥の皮、松の皮、稻稈などで製す) 石腦油、泥炭、柴炭(これは津輕邊の人泥炭にかへて用ふ)、生人蔘、桑酒、其他、書畫、古器物等であります。

右天覽も終つて廳内にある裁判所へ進ませられ、飯田七等判事が先導をなして各課を御覽になり、これも終つて參事鹽谷良翰は祝詞を捧げて居ります。

競馬天覽。

午後二時過ぎ、濱町へ御幸になり、伊東善五郎氏が自宅の前通りに建てた馬見所を天覽所と

なされました。

馬見所は現在の吉田湯の地が其の跡らしく、六間に二間を三間に仕切り、應接所、侍従の間、玉座として造つたものです。

競馬といふても、現在の競馬とは其の趣を異にし、濱町通りを馬場として乗り達者の譽ある者が、我れ劣らじと競争したのです。

明細日誌に、

「誰が先とも後ともなく、玉座の前を只むやみと此の町中を南北へ駆け廻り、向かふへ走るあれば此方へ来るありて、クルリ／＼と乗り廻ること凡そ二時間ばかりなり。」

と、あるところからすれば、餘程亂雑な競馬であつたらしいのです。

その上、出で立ちが面白く、士族だけは流石に衣服、立居振舞といひ各々其の流儀を守つて駆けたさうですが、村々の若者にいたつては其の服装色とり／＼で、紅い肌着に袴を着けた者、緋縮緬の

襦袢にたすきをかけた者、さうかと思ふと、紋付の羽織袴でしかつめらしい身なりをした者、洋服めいた装束、半天股引姿の者などで、何れも今日を晴れと曲馬師も及ばぬ立廻り演技を競ふたといふ事でありませう。

今村翁の語るところによれば、

「油川出身の澤谷平吉といふ若者も出場したが、これは立乗りの名人で、走る馬にひらりと立乗り、玉座前に進むと平伏し、過ぎると再び立上つて走るといつたやうに曲藝師のやうな立乗りの妙技を見せて観衆をうならせた。」

といふ事でありませう。

天皇陛下には、この競馬を感深げに御覧になり、伊東善五郎氏へは、拜講を仰せつけられた外、平素奇特の志ある上に更に聖駕青森に御着になるについて、馬見所を築き町民の競馬を天覽に供したといふので金百圓及び三組木杯を賜ひ、別に金五十圓を善五郎以下の競馬人に賜はりました。

尙、青森病院へは木戸顧問、岩佐三等侍醫並に侍従を遣はし、院長川村貞二氏へ種々御訊ねあつて金二十五圓を賜つたといふことであります。

ハ 御發輦の日

十六日の朝まだき即ち午前六時頃、青森行在所を御發輦、濱町の海岸（舊棧橋の所）から小船に移らせ給ひ、やがて明治丸へ御乗込みになりました。

この時五聯隊の兵隊は海岸に整列して捧銃の禮をなし、縣官は御座船まで送り奉り、學校生徒も波止場に整列して今日の佳き日を壽ぎ奉りながら御見送り申上げました。

一般拜送者はあまりに多く、濱町から米町の邊まで一杯だつたといふことであります。

ところが朝は海上霧深く、咫尺を辨ぜざる程だつたので、しばらく霧の霽れるのを待ち、午前八時頃に漸く錨をあげ出航することになりました。

この時各船からは、天にとどろと祝砲を發し、御座船から響きわたる海軍マーチにつれて、春日

艦を先導とし、供奉船清輝號、テーパール船、高雌丸等を従へ、海邊に滿ち溢れた數千の拜送者を後にしづくと御進航なされたのであります。まさに歴史的な感激の一場面であつたらうと追想されます。

三 明治十四年の御巡幸

一 御巡幸の御趣意

此度は、奥羽地方から津輕海峽を越えて北海道の奥地まで御巡幸なされ、萬民のために親しくその營業を視たまひ、それが辛苦を察し、それらの家業をはげまし給ふ外、親に孝行な者、主人に信義を立てた者、婦女の道を守り、不斷の行跡正しく人のために厚き心がけのある人々を褒賞し給ふ御趣意と拜されます。（御巡幸部の都路に據る）

二 御道筋

明治十四年秋、車駕再び東巡、遠く北海道へ御巡幸あらせられ、又秋田、山形の二縣にも行幸なされました。

本縣は其の輦路に當るので、重ねて車駕の盛儀を拜し、龍顏の麗はしきを仰ぐことを得たのであります。

明治十四年の七月三十日、朝まだき東京を御發輦になり、道を東に進ませられました。東京から青森までは明治九年の東北御巡幸と殆んど同じ御道筋で、八月二十三日本縣三戸に御着きなされたのであります。之から、

- 二十三日 三戸御泊
- 二十四日 五戸御泊

二十五日 七戸御泊

二十六日 野邊地御泊

二十七日 青森御泊

二十八日 青森御駐輦

と縣内を御通輦遊ばされ、二十九日青森から御乗船し北海道小樽へ御上陸、手宮、札幌、千歳、白老、室蘭、森、函館と御巡幸の後、九月七日再び青森へ還幸あらせられました。八日御駐輦の後、弘前、秋田、鶴ヶ岡、山形、米澤を経て福島に至り前路を還幸になられ、十月十一日日出度く東京へ御着になられたのであります。

其の日數七十四日、明治九年の五十日に比べて二十四日長いのであります。

この日程は、初からのものでなく、途中變更になつたものであります。即ち明治十四年六月十一日に太政大臣三條實美の名によつて明治天皇東北北海道御巡幸の事が發表されましたが、その時の

御道筋は、秋田縣船川からすぐ北海道に御波海の御豫定でありました。これを聞いた當時の津輕地方民は非常に残念に思ひ、當時中津輕郡長であつた笹森儀助といふ人は、明治九年の時に建言書を奉呈した杉山龍江氏等と協議し、品川彌二郎に依頼して、山縣參議等の大官に弘前方面への御巡幸を請願したのであります。

其の願文は「御巡幸ノ龍駕ヲ津輕地方へ狂ケラル、ヲ請ヒ奉ル哀願書」といつて、烈々たる至情が讀まれるのであります。

この衷情を聞召し給ひましたか、其の後豫定の御巡路を變更し、前に述べたやうな御道筋で北海道から御還りの節九月七日弘前市本町武田清七家へ御休泊遊ばされるやうになつた事は、全く笹森儀助氏の至誠の賜といはねばなりません。

三 御巡幸の御模様

イ 御着輦の日 八月二十七日

この日野邊地行在所(野村治三郎)より青森まで、御馬車で立たせられました。

野邊地常光寺には明治九年の行幸にお供して斃れました花鳥といふ御馬の塚があるので金若干を寺僧に賜はり、また行在所へは金百五十圓、銀盃一組と紅白の羽二重各一疋づゝを賜つたといふこととであります。

昨日までの雨のため、道悪しく車輪を埋め引き得ぬところもあつて、御徒歩することもあり、漸く口廣の御野立所に至りました。

こゝでは小學校生徒が迎へましたが、珍らしい事には、申し合はせでもしたものが、白の筒袖に袴の者が多く、非常に目立つたらしく、青森新聞に、

「かまども多からず、饒なる村にもあらぬ様に見受けられたと、行幸によつて言ひ合はせて同じ衣裳を整へしならん。」と記してあります。

小湊では竹内與右衛門邸に於て晝食をとり給ひ、十二時過ぎ御立ちなされました。道の悪さも乾きましたので、中野村田村仁助邸にしばらく御休みの後、御馬に召しかへられ、浅虫の手前、鍵掛坂の御野立所に着かせられて、青森灣の風光に旅情を御慰め給ひました。有多字未井に至つたとき、久栗坂村の漁夫が五六艘の小舟をうかべて鯛をとつてゐました。之を御馬車のうちより御覽になられました。

野内村浦島の御野立所を過ぎると、青森も近く、縣官方はお迎へに出てゐましたし、拜觀者も多く、造道村の訓練所(舊練兵場)あたりから兩側にみち、堤橋からは軍隊側、米町には、小學校生徒といふやうに立錐の餘地がない程だつたといひます。

いよ／＼車駕青森へ入らせ給ひますと、軍樂隊は軍樂を奏し、軍艦からはおの／＼祝砲を發して壽き奉る中を、目出度く蓮心寺行在所へ入御あらせ給ひました。夜は煙火を揚げなどして御慰め申し上げました。

御駐輦の日 一二十八日

この日御名代として左大臣熾仁親王には師範學校、専門學校、中學校、病院を巡覽あらせられ、民間では、奥村準作、今泉清等市中及び近村から古器、古書畫などを集め天覽に供し、又六七名の有志が盆栽を供へ奉り、相馬辨次郎其の夜景を御覽に入れようと燈籠三十二個を献じました。天皇には殊の外御満足の御様子に拜されたさうであります。

左大臣が中學校、師範學校、専門學校並びに病院を巡覽せられた模様について申述べますと、午前九時中學校へ臨まれ甲級生葛西徳一郎、氏家謙曹、乙級生三上忠治の國史略の講義、教員長越川君が問ふことに對して氏家、葛西の兩名が之に答へるといふ授業の様を御覽になりました。更に師範學校、専門學校へ臨まれ、二級生淺井次郎の文章軌範の講義、化學生徒中村健次郎のヨードの試験と説明、同成田傳次郎、助手成田常藏の水素の試験、同山口辰三郎の水素の説明を御覽の後病院に赴かれ、患者の様子、經營等を御訊ねあつて御還りになりました。

ハ 北海道へ御渡海の日 — 二十九日 —

幸先を祝し奉るが如く天よく晴れわたり清々しき街路を七時半頃御馬車で海岸へ向け御進みなされました。釧路海岸まで陸軍の兵士兩側に整列して送り奉り、波止場へ御着御なられる頃、各艦より祝砲を發し、海兵は皆甲板に並んで祝意を表しました。

やがて御召艦扶桑に乗御し給ひ、金剛艦を御先導として軍樂裡に進航されました。

一般拜送者數千人、御渡海の無事を御祈り申し上げました。

二 函館より青森へ御着艦の日 — 九月七日 —

七日名残りなく晴れ、市中では朝まだきより御艦を待ち奉りました。午後三時頃金剛艦を先導に御召艦迅鯨、扶桑艦を供奉し、堂々御着港ならせました。

其の時各艦から多くの徽號を上げ、祝砲をうつて祝ひまつり、陸には陸軍の將兵等居並んで今日の佳き日を祝ひ奉りました。

主上、波止場から御馬車に召され行在所へならせ給ひました。

日の暮れる頃から各艦とも數十の砲燈をとぼし、數十の煙火をうち揚げ非常な賑はひを呈しました。之を見た里人達は行幸ならではかゝる事に逢ひぬと喜び合つたといひます。

この日二品能久親王には御名代として日進艦に便乗し、大湊へ向け航し、午後二時頃お着きになりました。隨行員として、大木參議、太田侍従、川村太政官一等屬等二十四名で、外に護衛として騎兵四名つきました。

大湊では、大湊小學校、城ヶ澤小學校の生徒の出迎へをうけ、久保莊助邸で御小休の後午後三時過ぎ御馬で田名部に向け御立ちになりました。

田名部への途中「大室牧場」の牛の放飼を御覽になり、田名部に近い萬人堂附近で田名部小學校と近村有志者、郡吏村吏の出迎をうけ、田名部公立中學校（圓通寺）に入らせられました。

中學校では、優等生山口直治、西山鐵之助、太田直藏、長坂眞次郎、森トキエ等の授業を御覽に

なられ、後郡吏村吏に謁見をゆるされ、御宿和歌字吉邸に御休泊なられました。

玄關には立派な馬をつなぎ、廣間には産物を陳列して御覽に入れたところ、其の中海巻、砂鐵、昆布、石炭、海素麵など、數種を御買ひ取りになられました。

御宿では一町田郡長より郡政についての言上あり、尙縣吏、有志者に謁見をゆるされましたが、なかでも宇吉の母と伯母とは、八十餘の高齡にもかかわらず、尙壯健だといふことで、御膝近く召し、金若干を賜はりました。思はぬ患に袖をぬらし、かゝる里ではまたと逢ひ難しと伏して感泣したといひます。

又立花文左衛門といふ人が園藝が好きで、茶を栽培し、宇治で手習ひしたといふ弘前の三浦武次郎を屈ひ、葉を作つたところ優良なる品が出来たので、里の土産にと献しましたら、金若干を賜はりました。尙郡吏村吏等へも金十六圓七十五錢、有志には五十圓、中等教員と優等生五名には三圓、小學校教員には一圓七十五錢を酒饌料として賜はりました。

小學校へは太田侍従と川村一等屬が臨まれました。

ホ 御駐輦の日 九月八日

八日は御滞在、お慰みにと漁りを侍従に仰せられたところ、澤山の獲物がありました。之を皆騎兵に賜つたとの事です。

行在所では御直に獵銃を御持ち小鳥などを追ひ給ひ、つれづれを御慰みられました。

柳町の消防夫は、ポンプを御庭へ運び、之を侍従が生樹の上に筒口を向け、驟雨になぞらひて慰め奉りました。

昨日御代巡として田名部にお泊りの二品能久親王は、かねて孝子として仰せあつた田名部の佐々木金藏と其の妻きくの、大畑村の竹野小次郎、川内村の貞婦藤田キンに謁見をゆるされ、更に田名部川から御船で大湊にいたり、再び久保莊助邸でお休みになられました。

その時、小學校は新築中で工事半でありましたが、御臨校を請願しました處、太田侍従を遣はさ

れ、金二圓五十錢、有志者には五圓を賜りました。

午前七時三十分、御名代の役を滞なく果して再び日進艦に召されて青森へ御還りになりました。

田名部、大湊は風化も及ばぬところと心ある者は常に歎いて居たのであつたが、此度の有難き御沙汰はいたく身にしみ、老をば扶け、幼きを負うて皇恩に浴した者多く、願ふ心が雲井にといたと、みな悦び合つたといひます。

へ 青森御發轫の日 — 九月九日 —

午前七時頃御馬車で行在所をたせ給ひ、石江村江渡茂吉邸でしばらく御休みにになりました。このあたりは一面原野であつたが、江渡茂吉が開拓してから移住する者が次第に多くなり、一村を形成する迄になりました。世の人は之を呼んで江渡村といふやうになりました。

新城からは山勝で、中でも鶴ヶ坂ははしかつたので、青森の消防夫の内、選ばれた若者百人許り鳳箆をひいて越し、坂の上で御休みにになりました。供奉の方々は皆徒歩で上りました。

御巡幸に先だつて山路を避けさせようとして、村の西端から牧川に沿うて新に隧道をうがち、大釋迦村に出るやうに計畫し、前年の秋頃より着手したのでありましたが、間に合はなかつたのであります。

大釋迦村の對馬丹藏邸に御小休、之より沿道小學校生徒の奉迎をうけさせられ、午後一時三十分頃浪岡平野喜八郎邸に成らせ給ひ、御晝食を召し上げられました。

中野村あたりで珍らしいことは、高い机の上に、神酒と土器とを載せ置き、鳳箆が御通りになると、拍手をうつて地に細づき、國家安全五穀成就を禱つたといふことであります。

更に黒石では二階に紅白の幕などを張り、黒石神社の傍に設けた行宮の前に縁門を作つて國旗を結びつけ、神官は直垂の晴着に威儀を正してお待ち申しました。

鳳箆御行列が近づく、と、神樂殿では、神樂を奏し、天皇玉座に着かせ給ひますと更に二曲を奏して奉迎の意を表しました。

次の御小休所は馬耕傳習所の前で、こゝでは二三十人許りの白い筒袖の襦袢姿の者が、馬耕を天覽に供し、境塚村、平川を経て午後六時過ぎる頃、弘前武田清七郎の行宮につかせ給ひました。

弘前では夕方から家々の軒端に毬燈を吊り、中には短冊などを附けたりし、長町や土手町あたりには縁門を作り、それに毬燈數十をとぼして賑々しくお祝ひしました。また若者はねぶたを御覽に入れようとしたが、主上にははや御寝つかせ給ひましたので取止めになりました。

十日弘前御發轍、石川、藏館、碓ヶ關を経て秋田、山形、福島に至り、往路を再び御通轍、七十四日目に東京へ御還り遊ばされました。

ト 供 奉 員

總員三百六十名、之に御先發の十六名を加へると三百七十六名、尙其の他に人夫約八百名の大勢であります。

主なる高官は、

- 二 品 能久親王
- 左大臣 熾仁親王
- 参 議 大隈重信
- 同 大木喬任
- 内閣大 金井尙文
- 書記官 立見尙文
- 歩兵少佐 德大寺實則
- 宮内卿 米田虎雄
- 侍從長 御先發人
- 参 議 黒田清隆
- 内務卿 松方正義

四 青森市行在所

蓮心寺

寺町蓮心寺は明治天皇御巡幸に際し、明治九年、同十四年の再度三回に亘つて選ばれて行在所となつたお寺であります。

即ち、明治九年には、七月十四日御着筆、十五日は御滞在、十六日函館へ御出發となつてゐますから、三日二泊。

明治十四年には、八月二十七日御着筆、二十八日は御滞在、二十九日は北海道へ渡らせられましたから、三日二泊。

九月七日函館から還幸御着筆、八日御滞在、九日弘前へ御發筆となつてゐますから、三日二泊。

都合九日六泊の御駐筆を辱うした東北地方第一の尊き御聖蹟であります。

御用勤めし康を以て明治九年七月十六日御發筆に際し、御手當金として金二百圓を御下賜、明治十四年九月九日には金三百五十圓、白羽二重一疋を御下賜になつてゐます。

よつて行在所は、尊き御遺蹟として保存して來たのでありますが、明治四十三年五月三日の大火的の厄に遭ひ、全部を焼失しました。

今、記念として残つてゐるものは、行在所玉座床の間小襖四枚と記念寫眞があります。

今上陛下御即位記念事業として、同寺に於て行在所再建を議決し、昭和五年七月一日工事に着手、

同十月三十一日竣工しました。

總建坪六十三坪、工費一萬五千八百八十圓、建物は原形其のまゝを條件としたのであります。床の間小襖だけが、装置に於て、照明器具、避雷針の設備をなし、玉座の一部を模様替しました。床の間小襖だけは其の當時のものを取付けてあり、昔の面影がうかがはれて襟を正さしむるものがあります。

本堂の前庭東側に名水の古井戸があります。三回に亘る行在所御用に際し、御膳水に選ばれたのでありましたが、大火の時埋立てられて其のまゝとなつてゐます。

本堂の支關に赤松の太木がありました。御滞在の時に近江八景の名松にも優ると賞された程の美事な笠松で、樹の太さは三抱へに餘り、高さ三間位、枝の廣さ八間餘りもあつたといひます。

大帝には行在所人御の度毎に御見返りあり、御賞覽あらせられたといふ事で、後に「見返の松」と名付けて保存したのでありましたが、大火の際惜しくも焼失しました。其の代りの松として米町濱田吉兵衛翁の寄進したものを植ゑましたがこれ又枯死しました。

五 御巡幸餘録

一 浅虫椿旅館御小休問題

浅虫椿旅館御小休の事については、少しもふれないで置きましたが、之ははつきりしないためであります。

しかし「青森縣に於ける明治天皇の御遺蹟」の著書四十九頁には、

「浅虫及野内に御小休させ給ひて……」

とあり、又昭和四年十一月三日の青森日報は、

「浅虫椿 館内の記念塔」の見出しで次の記事を掲載してゐます。

「椿 旅館主蝦名伊右衛門氏は同旅館庭園内に明治天皇が明治九年同十四年の東北御巡幸の御小休遊ばされたる光榮に感激し、之を永久に子孫に傳へんと宮内省當局の許可を得て同庭園に明治大帝御休憩記念塔を建設することとなり、是の地鎮祭は大帝御休憩を忝うしたる御當日の七月十四日に因み、去る十月十四日特に宮内省御歌所寄人千葉胤明先生の参列を得て舉行された。當日當主十七代目伊右衛門氏始め一門朝來齋戒沐浴して身を清め、庭園中央に白木の祭壇を設け

白幕を張りめぐらしていとも壯嚴に飾りたてられた。

主なる來賓は、千葉先生、平井知事、工藤鐵男代議士、中野青森市長、杉山縣會副議長、芳賀青
「警署長等である。」

之を以てすれば淺虫小休は否定出来ないやうになりますが、明治九年印行の「御巡幸明細日誌」や
明治十四年の青森新聞の記事には淺虫御小休記載の箇所なく、故一戸岳逸氏も生前極力之を否定
して居りました。

只、一つの證據となるべきものは、縣廳にある請取書で、

一金七圓五十錢

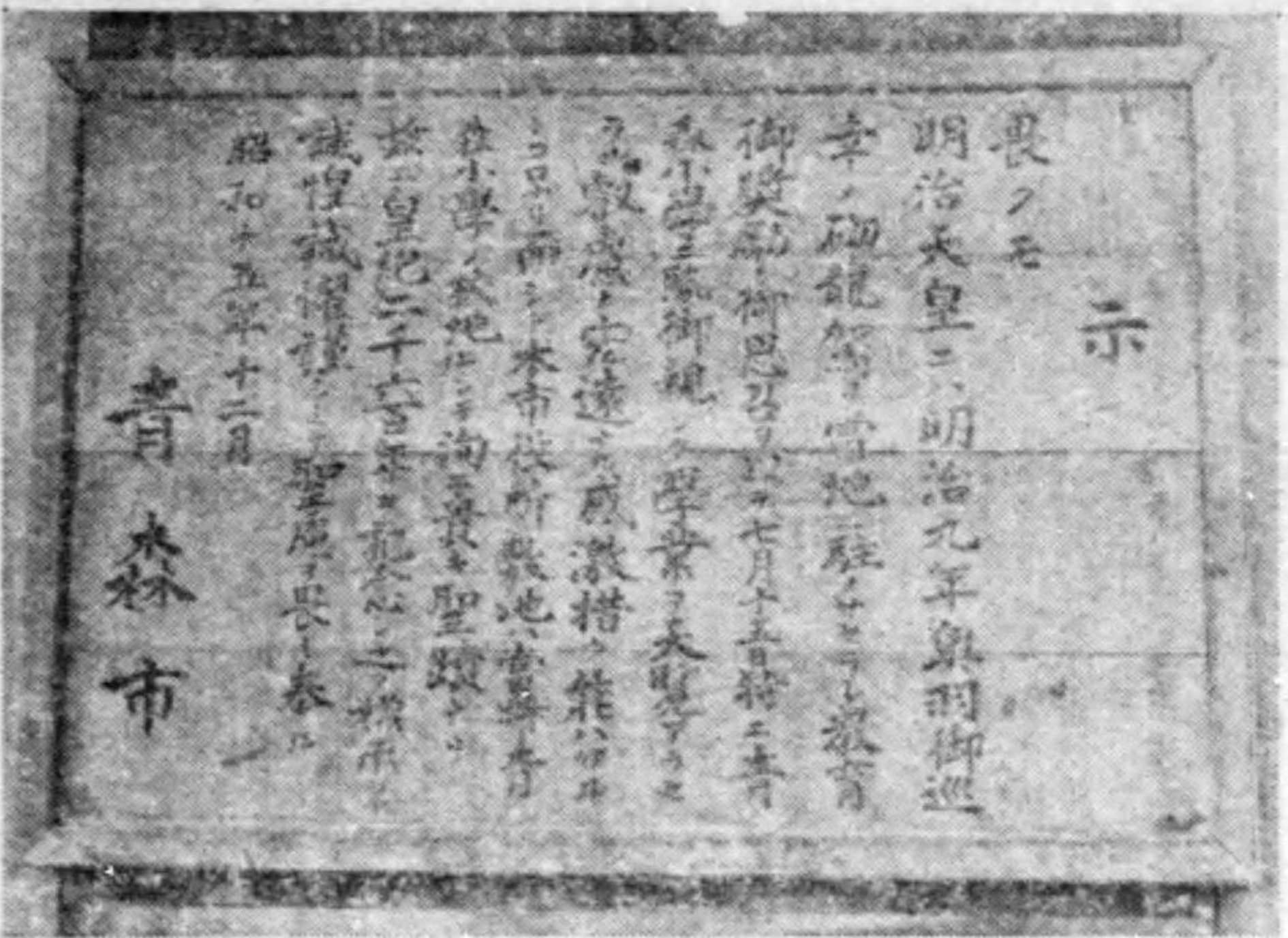
右者第一大區六小區淺虫村

御小休所蝦名伊右衛門被下置難有奉請取候 以上

があります。しかし御休所としては、あまりに額が少ない所に疑問が持たれて居る様であります。

二 青森小學校玉座の位置について

明治九年七月十五日明治天皇青森小學校に臨御あらせられました時の玉座の位置であります、
青森小學校の一生徒として學んだ窪田春吉先生は、幼な心にも傳へ聞いた感激忘れ難く、晩年の教
育事業として教育記念塔建立を思ひ立ち、着々研究の歩を進め粒々辛苦の結果、漸く玉座の跡を探
し當たのであります。先生の説によれば、玉座は青森小學校南側中央に特に設け、其の御室には
御紋章を配した側壁になつてゐたもので、現在では市役所戸籍係の窓下あたりになるといふことで
あります。然るに故一戸岳逸氏は之を反駁し、南側と全然反對な北側と主張し出したのでありま
す。之が玉座問題として、しばらく論議されておりましたが、明治九年七月十五日青森小學校主上御
臨ニ付手續書」によりますと、明かに南側と推定されるのでありますから、窪田先生の説は正しい
ものとして一應認めるのが妥當のやうであります。



御 掲 示

五〇

この事は千葉市長の聞くところとなり、皇紀二千六百年の青森市の尊い記念事業の一として玉座の跡と思はれる附近に聖札を建て、往時の感激を新にし、又これを語り継ぎ言傳ひして永へに大御心の有難さを偲び奉ることとなりました。

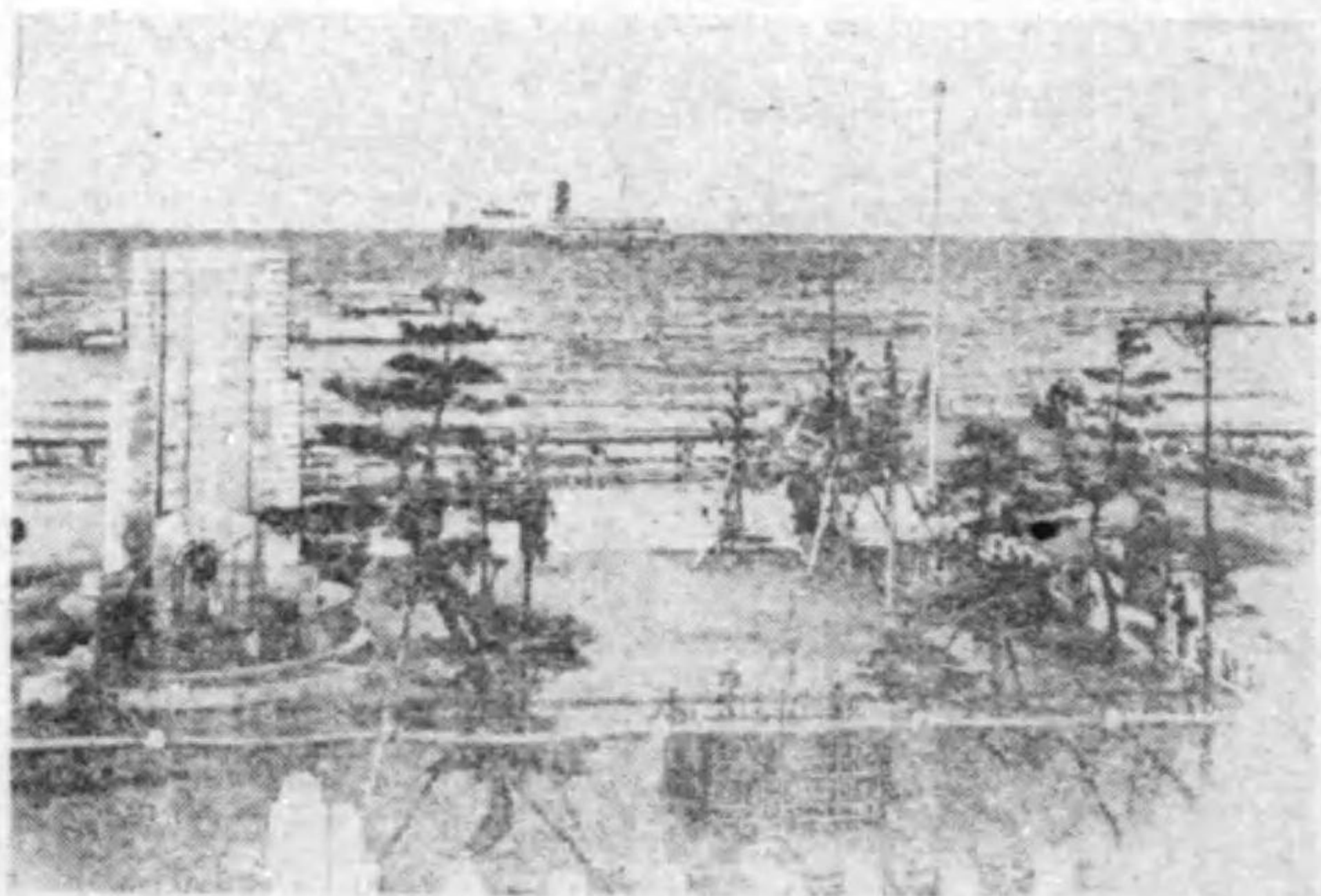
三 聖 徳 公 園

波静かな青森灣を背景にして、青松を植ゑめぐらしてゐる聖徳公園に入り、「景仰聖徳」の記念塔を仰ぎますと、そとろに明治天皇の御徳が

偲ばれます。

畏くも明治天皇には、この埠頭から二回御上船、一回御上陸になつてゐます。それをくはしく申しますと、明治九年七月十六日函館へ御渡海の際に御乗船なされ、明治十四年八月二十九日にも同じくこの埠頭から御乗船なされ小樽港へ御渡り遊ばされました。

これが二回の御乗船であります。御上陸は明治十四年九月七日で北海道御巡幸も終り、御還りの際でありました。



聖 徳 公 園 の 全 景

五一

このやうに三回も聖澤に浴した地は日本中にも珍らしく、特に青森市としては永へに記念すべき聖地であります。

九月の御上陸から約五十年を経て、相馬武一、伊藤政助、穴戸善三郎、故吹田銓三郎、故松岡圓藏、宮崎芳之助諸氏の有志者はこの聖蹟の湮滅をおそれ、昭和三年十一月今上天皇陛下御即位を機会に行幸記念碑を建てようとはかり、同五年起工式を挙げ、十月廿五日竣工、十一月三日の明治節の吉日に除幕落成式を挙げました。

初めこの事が一般に傳はるや、賛同する者多く、殊に小學校生徒の眞心こめた勤勞奉仕などもあつて、市民舉つてこの事業に参畫したのであります。したがつて聖徳公園にある一木一石に市民の赤誠が宿つてゐることを忘れてはなりません。

記念塔正面の「景仰聖徳」の御題字は、長くも閑院宮殿下の御染筆であります。全國に八百餘ヶ所の聖地がありますが、殿下の御染筆になつたものは聖徳公園ばかりだといはれてゐます。

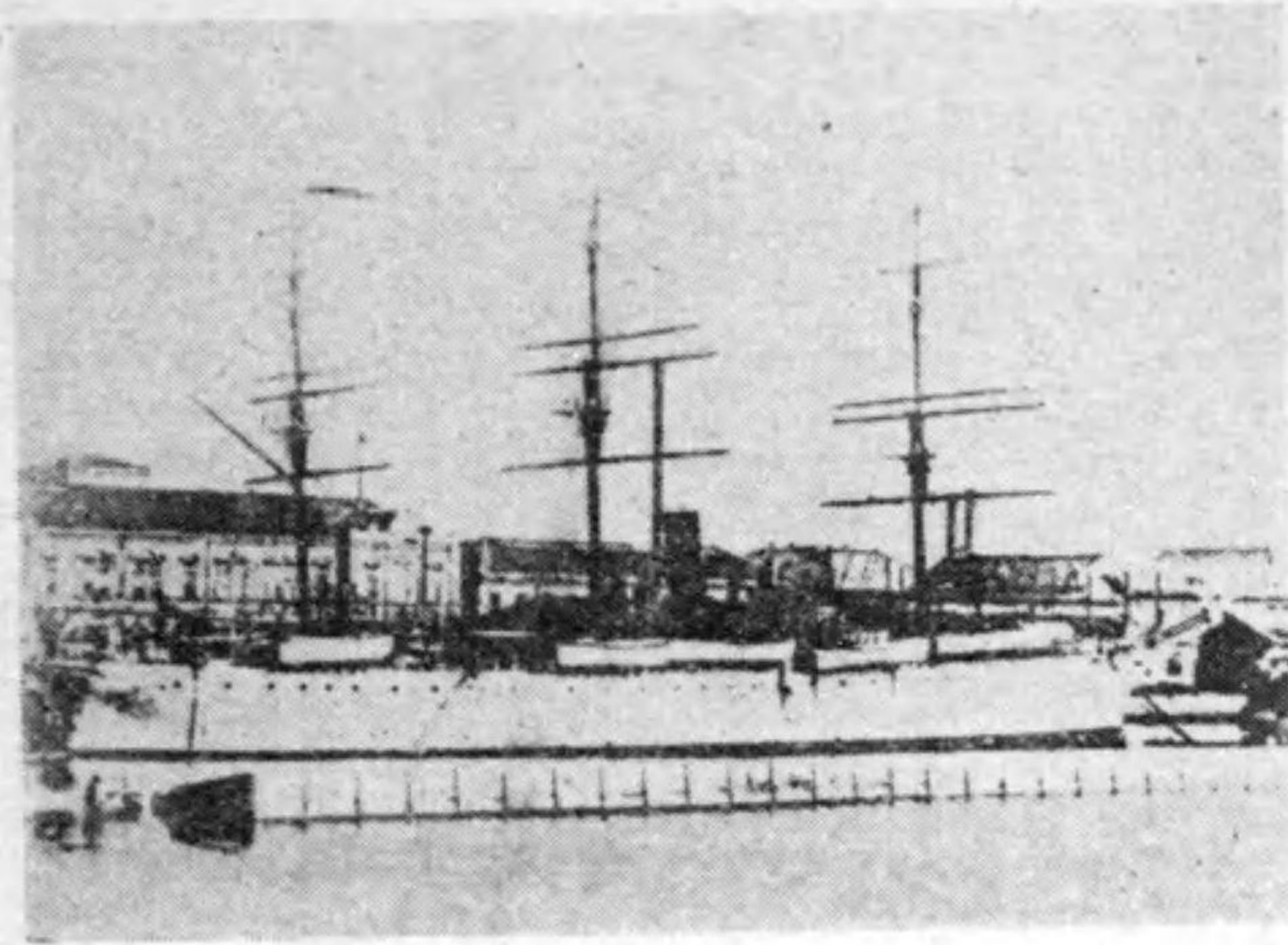
この外に陸海兩將軍東郷元帥、一戸大將の揮毫もあり、全國に其の名をひろめてゐます。

寶殿には明治天皇、昭憲皇太后御二方の御眞影と御關係寶物を奉安することになり、其の式典は昭和十年十一月三日の佳節に、いともおごそかにとり行はれましたが、平生は善知鳥神社の本殿に安置されてあります。

昭和十二年四月文部省では史蹟として指定し、十月に舊棧橋のやゝ中央に「明治天皇青森御乗船並御上陸棧橋跡」として碑を建てられ、永久に保存される事になりました。

四 明治丸と海の記念日

東京深川越中島の東京高等商船學校の繋留池に明治三十五年このかた白色の船体を横たへ、海洋に雄飛しようとする青年から敬仰されてゐる船があります。この船こそその昔明治天皇が東北を御巡幸あそばされた際のお召艦として由緒深い船歴をもつた明治丸であります。



明治丸

長さは二四二尺、幅二九尺二五、總噸數一〇二七・五七となつてをり、白色の優美な蒸氣船だつたさうです。

明治九年七月、燈臺頭佐藤與三に對し明治丸によつて鳳輦を青森にお迎へするやう御下命がある、直ちにテールポール號を伴つて青森に廻航され、光榮の日を待ちました。

七月十六日午前六時頃、天皇青森行在所を御發輦になり、明治丸に乗御、海上深くたてこめた朝霧のため八時頃御出航、午後二時半頃函館にお着きになつて身出度く重任を果したのであ

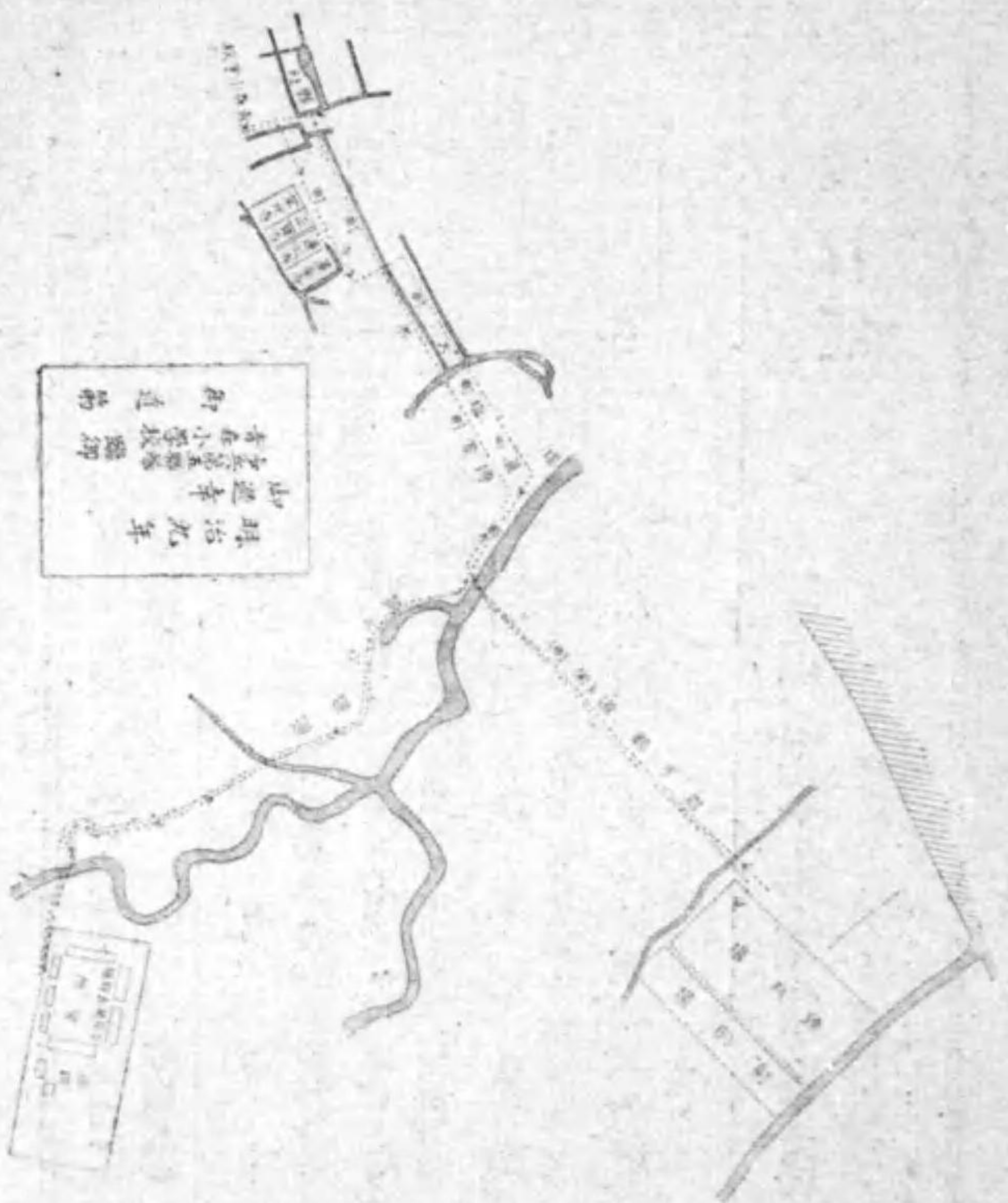
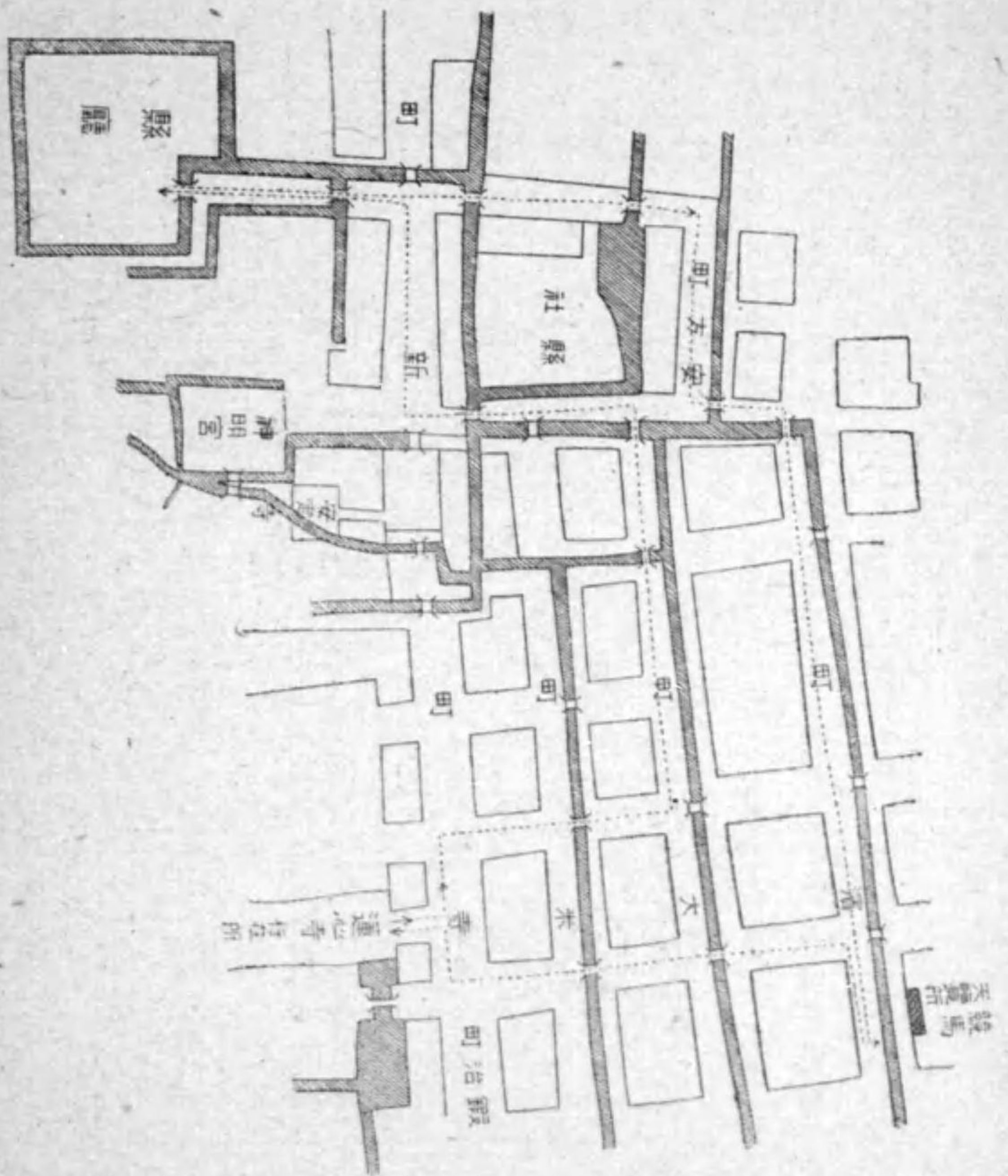
ります。

第二回は七月十八日で、再び御座船として函館より午前八時高雄丸の奏樂裡に横濱に向け出航されました。途中霧深く進路をなやまし、南風が吹き始めてからは意外に動搖が激しくなつて難航を續けられました。然し幸ひ何事もなく二十日、日もとつぶり暮れて港の灯が海面を染める頃（午後八時十分）横濱に御到着なされたのであります。其の後改装はされて居ますが、船内の御座所は天皇乗御當時のそのまゝを保存されてをります。

本年から横濱御到着の日を以て「海の記念日」と定め、海國日本に一層の光輝を加へることになりました。

御發航の地、我が青森市も日本全國と呼應し、本年七月二十日聖地聖徳公園に於て盛大なる記念式典があげられ、市民ひとしくその感激に浸つたばかりでなく、此のゆかりある誇りを持つことを心から喜び合つたのであります。

明治九年御巡幸
縣廳臨御
縣馬天覽御道筋




山遊寺
明治九年
寺在小學校跡
御道筋

Handwritten notes in the top right corner, including numbers like 14102 and 14101, and some illegible characters.

昭和十六年十月二十日 印刷
昭和十六年十一月一日 發行

明治天皇青森巡幸記 (奥附)
(非賣品)

不	編者檢印	複
許		製

編輯者 森 山 秀 雄
青森市長島町百拾四番地

發行者 森 山 久 五 郎
青森市浦町字野脇九拾壹番地

印刷者 能 登 谷 末 藏
青森市新町六拾壹番地

印刷所 東北印刷株式會社
青森市新町六拾壹番地

發行所

青森市新町國民學校

青森市長島町(百六拾九番地)
電話 貳六貳七番

民國廿七年五月五日

製本控

日	月	年	號	函	217
102拾天星書藝巡幸記					
肆					

備考

電話 貳六貳七番

917
102

917
102

終

